

上吉田御師の町割に関する研究

荒井 直樹
指導教員 八尾 廣
建築設計計画 I 研究室

1. はじめに

1.1 研究の背景と目的

上吉田御師の町は、現在の山梨県富士吉田市上吉田の国道 139 号線の金鳥居を起点とし、北口本宮富士浅間神社を終点とした町である。

上吉田御師は、かつて富士山を信仰する人々の登山の世話をし、自宅を宿泊所として提供する人々であり、その住まいを御師の家と呼ぶ。御師は上吉田に住まいを構え、富士山信仰を支えてきた。

そんな当時の富士山信仰で重要な役割を果たした上吉田御師であるが、一般的な町割ではなく特徴的なものである。現在の国道 139 号線である富士みちから東西に細長く短冊状のような町割となっている。また屋敷が街道からセットバックした造りとなっている。現存する旧外川家住宅はこれらの特徴を現在でもうかがうことが可能である。

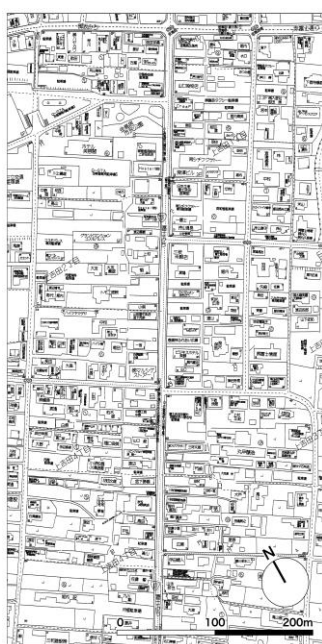


図 1 上吉田御師の町割



図 2 旧外川家住宅平面図

本研究では、上吉田御師について、どのような経緯を経て細長く短冊状のような町割が生まれたのか、また屋敷が街道からセットバックした造りになっているのか、当時の出来事や文化、土地柄などに着目して考察を試みる。

1.2 研究方法

上吉田御師の町の形成や歴史的経緯に関する文献を調べ、得られた情報に基づき、町割形成の背景や経緯に関する考察を行う。文献では得難い情報を収集するため、現地にて

御師の関係者より口頭伝承についてヒアリングを行い、情報を補完する。以上により得られた情報を整理・総合し、町割り形成の理由や経緯について考察し、まとめを行う。

2. 富士山信仰について

富士山信仰とは、美しい富士山そのものを神と見立て信仰することである。古来では、その美しさとは対照的に、噴火を繰り返す恐れ崇められる存在でもあり、当時は「遥拝信仰」であった。平安時代末期に入ると、富士山の噴火活動が沈静化し、「登拝信仰」へと変化していき、富士山中で僧侶が修行をする場となった。室町時代に入ると、「富士講」という組織が、江戸をはじめとした関東地方に広まった。江戸時代末期には、庶民の間で盛んになった。

3. 上吉田御師について

3.1 成立と歴史

上吉田御師の町は最初から現在の上吉田にあったわけではなく、東に 500 メートルほど離れた古吉田と呼ばれる場所にあった。古吉田の周辺での、雪代と呼ばれる富士山の融雪洪水の被害を避けるため、元龜 3 年 (1572 年) に古吉田から現在のの上吉田に町を移転した。最初は指導的立場であった 5 軒の御師が上吉田に移住し、新規御師や下吉田の住人が次々と移住し始めた。その結果、最盛期には 80 軒程度の御師が活動していた。

3.2 屋敷構成

敷地の入口には門柱が建っており、門柱から中門までは玉砂利の敷いてある「タツミチ」が続く。タツミチの両側には、当時「前屋敷」が軒を並べていた。前屋敷に移住していたのは譜代や田畑の小作人、登山者の供をして荷物を担ぎ上げる強力である。タツミチが終わり中門をくぐると、「ヤーナ川」が敷地内を横断するように流れている。ヤーナ川は、到着した登山者が禊をするために設けられたものである。ヤーナ川で禊を済ませようやく「本屋敷」に入ることができる。その後、屋敷の奥にある「ゴシンゼン」の前で御師のお祓いを受ける。本屋敷の奥には「裏地」と呼ばれる場所が存在し、農地として活用していた。



図 3 タツミチ



図 4 ヤーナ川

4. 上吉田御師町における短冊状町割成立に関する考察

4.1 地形や環境による要因

富士吉田市は、富士山の噴火活動により溶岩が流れ形成された溶岩台地である。溶岩は、水はけがよく雨水などの水を確保することが困難である。短冊状の町割は、道路や用水路などのインフラ整備を最小限に抑えつつ、最大数の敷地に接することができる。生活用水を確保することが困難な地域では、短冊状の敷地が合理的であったと考えられる。

4.2 古吉田からの移転時の要因

上吉田御師の町は古吉田から移転して成立した町であるが、古吉田の集落形態をそのまま置き換えるといった、集落移転であったとは言いきれない。移転直前に作成された元亀元年(1570年)『西念寺々領仕置日記』によれば、西念寺の再建に際して支援金を負担した屋敷が下吉田のみに属しているのに対して、『屋敷割帳』では東町や西町に属していることが見られる。以上より、下吉田の住民移転まで含めた計画的なものと考えられる。

このことから、世帯数が増加したことがうかがえる。限られた土地であること、また地形や環境による要因から、主要道路や用水路の数を最小限に抑える必要がある。古吉田からの住民の敷地と下吉田からの新たな住民の敷地が表通りにすべて面するためには、短冊状の敷地が合理的であったと考えられる。

4.3 宗教的意味合いによる要因

上吉田御師の敷地は、神社の境内と似ている。北口本宮富士浅間神社へ向かうと、境内の入口に鳥居が建っている。鳥居は、神社の神様がいらっしゃる聖域と一般住民が暮らす俗界を隔てるものであり、神社は神様がいらっしゃる場所であることを示している。鳥居をくぐると、玉砂利が敷いてある参道、敷地を横断する小川が流れている。小川を過ぎると中門が現れ、その先に本殿が建つ。このように、神社の境内と上吉田御師の敷地は比較してみると似ていることがわかる。鳥居と門柱、参道とタツミチ、中門、小川、本殿と本屋敷、それぞれ同様の意味を成して存在している。このことから御師の家が連なる街道と御師の敷地内は、街道として役割を果たしている俗界と神様がいらっしゃる聖域とで分けられていたのではないかと考えられる。

5. 口頭伝承に関するヒアリング

現地にて御師の関係者に対するヒアリングを2020年9月、12月に行なった結果を以下にまとめる。

①移転前の上吉田には住人が暮らしていたのか。

(回答) 元亀3年(1572年)より前の上吉田には住民は暮らしておらず、せいぜい畑程度の利用であった。よって上吉田御師の町は、何もない場所に新たに一つの町を築いた計画的なものである。

②上吉田御師の町は移転当時から短冊状の町割だったのか。

(回答) 古吉田の移転直後である元亀期に、すでに短冊状の町割が成立していたかについては不明だ。元亀期の敷地調査では、本屋敷と前屋敷の住人の合計を記録しており、

前屋敷や本屋敷の各住人数を明確に記録していない。明確に記録されるようになったのは、江戸中期から後期にかけてである。しかし①での回答でも述べた通り、上吉田御師の町は何もない場所に新たに一つの町を築いた計画的なものであるため、移転直後の元亀期にはすでに寛文期のような「前屋敷+本屋敷+裏地」といった屋敷構成が成立していた可能性は高い。

③なぜ本屋敷は街道からセットバックした位置に屋敷を構えたのか。

(回答) 街道からセットバックした位置に屋敷を構えた要因として主に2つのことが考えられる。

まず1つ目の要因として、宗教的な意味合いが挙げられる。上吉田御師の町は、宗教や信仰といったものを重視していたため、神社の境内を意識した町づくりを行った。

2つ目の要因として、敷地を最大限に活かす方法としていたことが挙げられる。前屋敷は、借家のほかに店などの屋敷も構えていた。これらの店は、街道沿いに面することによって、客を増やすことができる。一方、宿泊施設の本屋敷は、街道沿いに面する必要はない。登山者は師檀関係のある御師の屋敷へ宿泊する決まりとなっていた。よって、一定数の客を維持することが十分可能である。

以上より、宗教的意味合いと敷地を最大限に活かす方法といった2つの要因が重なり街道からセットバックした位置に屋敷を構えたのである。

6. まとめ

以上より、上吉田御師の町割成立に関し、本研究で明らかとなった事項を以下にまとめる。

- 1) 上吉田御師の町が、移転当時から短冊状の町割であったか不明である。
- 2) 上吉田御師の町は、何もない土地に新しい町を築き上げた計画的な町である。
- 3) 宗教的意味合いと敷地を最大限に活かす方法の2つの要因より、屋敷が街道からセットバックした屋敷構成が展開された。
- 4) 富士吉田市の水不足という事情から、これを解決できる短冊状の町割を形成した。
- 5) 広域的な再編成による世帯数増加と水不足問題よりこれを解決できる短冊状の町割を形成した。

参考文献

- 1) 伊藤裕久：近世都市空間の原景一村・館・市・宿・寺・社と町場の空間形成，中央公論美術出版社，2003
- 2) 伊藤裕久：上吉田御師町における元亀・慶長期の町割について，日本建築学会学術講演梗概集，1992.8
- 3) 高埜利彦：富士山御師の歴史的研究，山川出版社，2009
- 4) 外川家住宅学術調査会編集 富士吉田市歴史民俗博物館編集，富士吉田市教育委員会：富士山吉田口御師の住まいと暮らしー外川家住宅学術調査報告書一，2008
- 5) 平野榮次：富士浅間信仰，雄山閣出版株式会社，1987
- 6) 富士吉田市：富士吉田市歴史文化基本構想，2019.3，https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/rekishibunka/pdf/r1392234_118.pdf
- 7) 富士吉田市教育委員会市史編さん室編集：上吉田の民俗ー富士吉田市上吉田一，富士吉田市，1989
- 8) 富士吉田市史編さん委員会編集：富士吉田市史，富士吉田市，1992